



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	老親を介護する子どもの介護関係についての意識-沖縄の一農村において-
Author(s)	佐伯, 和子; 崎原, 盛造
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 2 号: 9-16
Issue Date	1999 年
DOI	10.15114/bshs.2.9
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6585
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n1344919229.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

老親を介護する子どもの介護関係についての意識 －沖繩の一農村において－

佐伯和子¹, 崎原盛造²

札幌医科大学保健医療学部看護学科¹

琉球大学医学部保健学科²

要 旨

沖繩の一農村において在宅で老親を介護している子どもの介護関係の意識が、どのような介護行為となり、介護者自身の介護の意味づけとなっているかを明らかにした。

対象は在宅で6ヵ月以上介護をしている家族介護者で、12家族、14人の介護者である。データの収集は面接法および参加観察法を用いて平均5.8回の訪問を行い、分析は質的データを用いた。

要介護者である老親との情緒関係についての意識では介護者には「愛情」と「葛藤」がみられた。役割においては「世話係」として認識し、介護による犠牲感が認められ、介護遺棄がみられた。また、異性を介護する葛藤もみられた。勢力関係では「恭順」と「保護」と「支配」の意識が認められた。

介護保険の導入に伴い在宅介護の形態が大きく変化することが予測されるが、家族の持つ情緒的機能を生かした上で、専門職が行う世話としての介護が重要になると考えられる。

<索引用語> 老親介護、在宅ケア、介護関係、家族関係、

はじめに

後期高齢者の増加とともに介護を必要とする老人は増加する一方で、施設ケアの限界や在宅志向の増加により、在宅ケアにおける介護力確保は重要な課題となっている。現状では在宅介護の主な担い手は家族であり、要介護者の年齢が80歳以上になると、子ども世代が介護を担当することが多くなっている。

在宅介護はストレスや負担の多い仕事であり、先行研究では主に介護負担やストレスおよび継続意欲等に焦点があてられてきた¹⁻³⁾。また、近年は老人虐待が深刻な問題として注目を集めている⁴⁾。在宅介護は多くの課題を抱えているが、介護される高齢者にとっても、介護者にとっても、貴重な人生の一過程である。在宅介護の意味を検討するためには、まず負担の大きい介護を担当している介護者自身の視点から、介護することをどのように意味づけているのかを明らかにすることが重要である。

子ども世代が老親を介護する意味に関して、山本⁵⁾は生きがいとなり得るが、そこには価値と困難のパラドックスの存在があることを指摘している。また井上⁶⁾は介護者と被介護者との人間関係に着目し、「相互性」の概

念を用いて人間関係の質の意味を検討している。介護は介護される老人と介護者の相互作用であり、続柄による負担感の違いや介護動機の違いは量的データを通して明らかにされている^{7, 8)}。しかし、介護者自身の介護の意味づけに関する研究報告はほとんどない。

したがって本研究では、子どもである介護担当者が介護における老親との関係をどのように意識し、どのような介護行為を行い、介護者自身の介護の意味づけとしているかを明らかにすることを目的とした。

研究対象および方法

1. 対象

対象地域は、人口1万2千余人で高齢人口割合が約13%、高齢者同居世帯比率が約24%の沖繩県の一農村である。研究の対象は、二世帯または三世帯家族で65歳以上の老親を介護している人である。要介護者の基準は厚生省による「障害老人の日常生活自立度判定基準」で、ランクA・B・Cの判定に相当すること、また痴呆の場合は終日介護が必要な状態とした。介護者の条件は要介護者との続柄が息子、娘、嫁等子どもの世代であり、6ヵ月以上介護をしていることとした。介護者と要介護者は同居を原則とし、近居の場合も含めた。

著者連絡先：佐伯和子 060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目 札幌医科大学保健医療学部看護学科

前記の条件を満たす事例で地域の保健婦が把握している19例の要介護老人（保健婦が日常的に訪問しているのは13例）のうち、2回以上の面談の承諾が得られ、継続訪問ができた12例の介護担当者14名を分析の対象とした。

2. 方法

介護は介護者と介護を受ける老人との相互作用であり、複雑な社会的、心理的要因が関連した生活の一過程である。その過程における介護者の介護の意味を追求するための方法として、象徴的相互作用理論⁹⁾を背景とするグラウンデッド・セオリー (Grounded Theory)¹⁰⁻¹³⁾を、データ収集および分析方法の参考にした。

データの収集は、自宅への訪問による参加観察法および面接法を用い、著者の一人（佐伯）が行なった。訪問は要介護者の健康状態を観察し、介護者の話しを聴くことに重点をおき、特に構成した質問は行なわず、介護者が提供する話題にそってすすめた。生活の場で自然な面談をし、対象者と良好な人間関係および信頼関係を保つために、テープレコーダーは用いず、収集したデータは訪問後にフィールドノートに記録した。フィールドノートへの記録は、訪問の全体の流れと個々の詳細なデータとに分けて記載した。

訪問期間は1992年11月から1993年10月までの1年間である。一事例への訪問回数は3回から11回で、平均5.8回であり、一回の訪問時間は20分から4時間で、平均1時間55分であった。データの信頼性については、一事例に数回の訪問を行ないデータの飽和を確認し、役場の保健婦に信頼性の確認を行った。

データの分析は、記載したデータのうち介護関係に関連する介護者の言動に、実質コードをつけた。そして実質コードの意味することをもとに、同じ特徴を持つものをひとまとめにして小カテゴリーとして分類し、ラベルづけを行なった。さらに小カテゴリーの関連とその中核となるカテゴリーを検討した。なお本論文は過去に収集したデータについて再度分析を行ったものである。

結 果

1. 対象の概要

対象の概要は表1のとおりである。要介護者は男性2名、女性10名であり、寝たきりが7名、準寝たきりが5名、痴呆は11名にみられた。介護者の状況は、年齢は30代が1名、40代が3名、50代が5名、60代が5名であった。要介護者との続柄は、娘5名、嫁6名、息子3名であった。

2. 介護者の意識

在宅で老親を介護している介護者の介護関係に関する意識について、最終的に6つの中核となるカテゴリーが抽出され、それらは情緒関係、役割関係、勢力関係の3つの領域に分類された（図1）。それぞれのカテゴリーについて、どのような状況でその意識がみられるのか、またどのような介護行為がなされているのか、介護にどのような意味づけを与えているのかについて検討した。以下、介護者の意識について事例のエピソードを用いて説明する。事例の紹介は否定的な感情や意識が含まれているので、プライバシー保護のため、氏名はすべて仮名とした。

1) 情緒関係（表2）

家族成員の情緒の安定は家族の持つ重要な機能である。老親介護において介護者には関係について、「愛情」と「葛藤」がみられた。情緒関係は現在の人間関係を最も反映しており、良好な人間関係においては愛情が多く表現され、関係が不良な場合は葛藤が示された。しかしこの二つの意識は二律背反で存在するわけではなく、在宅で看ようとする背景には、どの事例においても愛情が表現されていた。

(1) 愛情

老親と子どもの関係は血縁の有無にかかわらず、長年一緒に暮らしてきたことで、「家族としての絆」で結ばれていると考えられる。家族の一員として、老親のことを思う気持ちが介護者にみられる。子どもは内的な欲求である親の幸せな余生を願っており、生活の場で「家族

表1 事例一覧

家族No.	介 護 者							要 介 護 者					家族状況	
	介護者	年齢	続柄	健康	職業	副介護者	要介護者	年齢	性別	活動	痴呆	要介護期間	家族構成	家族員数
1	A.喜美	49	娘	健康	小売業	有	A.マツ	80	女	準寝たきり	中度	13年	三世代同居	6
	A.恵子	39	嫁	健康	無	*								
2	B.義男	64	息子	心臓病	無	有	B.カメ	88	女	寝たきり	高度	8	三世代同居	5
	C.常子	58	嫁	腰痛	無	有	C.ヨシ	86	女	寝たきり	軽度	6		
3	C.繁治	59	息子	高血圧	無	*							三世代同居	5
	D.八重	65	娘	高血圧	無	有	D.テル	87	女	準寝たきり	高度	20		
4	E.愛子	45	嫁	健康	無	有	E.セツ	69	女	寝たきり	なし	3	三世代同居	9
	F.秀子	50	嫁	腰痛	無	有	F.ツル	87	女	寝たきり	中度	7		
5	G.玲子	56	娘	健康	常勤	有	G.英喜	96	男	寝たきり	高度	3	三世代同居	4
	H.順子	60	嫁	鬱傾向	無	有	H.武政	91	男	準寝たきり	高度	2		
6	I.トミ	66	娘	慢性風邪	無	有	I.キク	87	女	準寝たきり	中度	8	三世代同居	5
	J.京子	48	娘	健康	パート	有	J.ナミ	87	女	準寝たきり	軽度	4		
7	L.孝子	61	嫁	健康	無	有	L.キヨ	94	女	寝たきり	高度	4	三世代同居	3
	M.博信	58	息子	健康	常勤	有	M.ヨネ	96	女	寝たきり	軽度	4		

氏名はすべて仮名

*副介護者

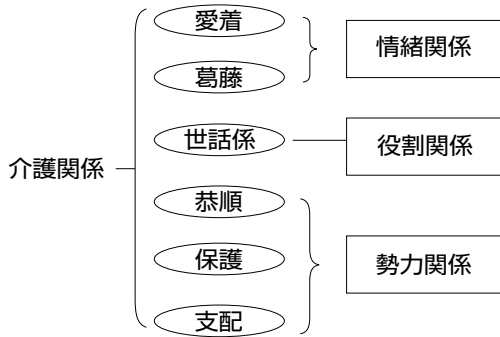


図1 介護における関係

と暮らすのが幸せ”であるという価値観に基づいて、障害を持つ老親を在宅で看ているといえる。現在の人間関係だけでなく、過去の人間関係も大きく影響している。それは苦勞して戦後の混乱期を育ててくれた親への“恩返し”であり、家族内で困っている時に助けてもらった“親への感謝”の気持ちである。

子どもの「愛情」に関連する状況として、親自身の在宅希望が挙げられ、子どもとしてはできるだけ“親の在宅希望をかなえたい”と思っている。また高齢者に対する延命医療への疑問や痴呆のある老人に対する病院での対応への不満、つまり“病院や医療への不満”が背景にある。

「愛情」を基盤にした介護は、情緒的交流を大切に、家族にしかできないようなきめ細やかな対応となっている。それは“親の楽しみを刺激する情緒的交流”を図るものであった。一日中ベッド上または屋内で過ごす老親の生活に、少しでも変化をつけたり、潤いを持たせようとする介護者の意識のあらわれであるといえる。老親の反応を嬉しそうに話すことから、介護者自身が親の喜ぶ姿を大切にしていることがわかる。また、褥創を予防するために下着の工夫をするなど、ずっと傍にいる家族だからこそできる予防的対応がみられた。これらのことから

表2 介護に伴う情緒関係

		愛 情	葛 藤
背景	現在の人間関係	・家族といることが親の幸せだと思う ・家族としての絆 ・何かすると感謝の気持ちを表現してくれる親との交流	・介護者の言うことを聞かない親との勢力争い ・行動が「できない」親への落胆
	過去の人間関係	・戦後の混乱期を苦勞して育ててくれた親への恩返し ・家族の中で困っている時に助けてくれたことへの感謝	・自分にとってはきつい姑で、苦勞した（争い） ・かわいがって育ててくれなかった（憎しみ）
関連事項		・親が在宅を希望している ・介護の社会的環境に関して、病院や施設での扱われ方への不満が介護者にある	・どうしてできないのか、と痴呆の理解ができていない介護者
介護行為		・親の喜ぶ顔を大切にした情緒的交流を図ろうとする ・褥創にならないように、手をかけ工夫をする（予防的対応） ・時として情緒的に巻き込まれ、暴言を吐く（言語による心理的虐待）	・できるだけ老親に近づかない（介護遺棄） ・思わず手をあげてしまう（身体的暴力）
介護の意味づけ		・生きがい	・ストレス源

介護をすることは介護者にとっては、“生きがい”のひとつとなっているといえる。

しかし娘と親の間では、厳しい言葉を使ったり、喧嘩をするような口調でのやりとりや遠慮のないやりとりがなされ、“言語による心理的虐待”がみとめられる。これらは状況を客観視できず相手の感情に引き込まれてしまっており、介護者は“情緒的に巻き込まれ”ているといえる。

喜美さんは脳卒中後遺症の母親の介護をして10年以上になる。母親のマツさんは戦争で夫を亡くし、女手一つで苦勞して4人の子どもを育ててきた。喜美さんは「おかあは良く働いてきた」と言っている。喜美さんの母親への接し方は、「無理はさせたくない」と言い、マツさんは室内を歩行することも少なくなっている。そして「おかあ」と何度も呼び掛け、マツさんの好きなラジオ番組をつけている。

順子さんは30年前に火傷をした時に、誰よりも親身になって心配してくれた義父のことを、「何があっても、この人の面倒を看よう、とその時決心した」と話している。

京子さんは4年前から脳卒中発作で右麻痺の母親の介護をしている。心臓発作で母親が入院した時、病院の食事があわず、方言が通じず、話し相手も無く、病院生活に適応できずに衰弱していく親をみて、無理に退院させた。その経験から、「孫が声かけしてくれる家がいい」と話している。

玲子さんは、「(父は) 病院でも大声を出してわめいていたので、…中略…丁寧に扱ってもらえなかった」と退院後に話している。しかし、玲子さんが仕事で疲れていららすると、「父親が察して『殺してくれー』と言うので、このまま死んでくれたらと思うことがあり、『もう死ねー』と言って、後から首を絞める真似をすることがある」と表情を硬くして話している。

(2) 葛藤

「葛藤」は介護を通しての介護者と老親との心理的な反目である。それは人間関係における“勢力争い”が継続していたり、過去の人間関係の“争いや憎しみ”と関連している。

さらに関連する状況として、以前と別人のようになり

身辺処理ができなくなったり、痴呆を呈している“親への落胆”がある。これは子どもである介護者にとっては親の痴呆を客観的に認知できないことと関連している。

また、嫁の場合はできるだけ客観的な状況に自分を置き、「葛藤」を避けようとする様子が見られる。その結果、介護者はできるだけ老親との距離を保とうとし、「介護遺棄」の状況が見られることがある。

介護関係における「葛藤」は介護者の心理的な“ストレス”となっている。

愛子さんは姑のセツさんにブザーで呼ばれたら、素早く排泄の介助や体位交換を行なっているが、「お母さんのそばには居たくない」と言う。

2) 役割関係 (表3)

(1) 世話係

介護は家庭内の集団的役割分担の一つとして行われており、その役割取得の背景には、社会規範の存在が大きい。介護役割は子としての義務であり、“あたりまえ”のことであるという意識がある。しかも介護は家族の問題であり、介護のことを外の人に相談するのは、家の恥をさらすこととして受け止められ、介護における“家族の閉鎖性”がみられた。介護に対する“世間体”が大きく介護者の意識に影響していた。伝統的な文化のもとでは介護は女性の役割とされてきた。中でも沖縄では“長男の嫁の役割”とされてきたが、近年は娘がその役割を担うことも多い。嫁や娘は経済的扶養との交換でこの役割を担当していることがある。要介護老人のうち、夫や子どもを戦争で亡くし遺族年金を受けている人が6名いた。子ども世代の経済的基盤が弱い家族では、老親の収入が家計費に補充され、“老親からの経済援助”と交換に在宅での介護がなされていた。

したがって、介護者は老親の「世話係」として自分の役割を認識していた。家族内労働であるため、介護は“無償の労働”となっている。

それらの結果、介護の実際では、“最低必要な世話”は行うが、話し掛けなどの情緒的交流はできるだけ回避しようとする態度が認められた。また、世間との関連では“過剰な責任”を感じており、事故のないように“完璧な介護”をしようとしていた。異性を介護する場合には、“身体接触への抵抗感”が認められ、嫁の場合は夫に協力を求め、息子の場合は女性の家政婦や妻に援助を求めていた。

介護の意味づけでは、介護を“家庭内の労働契約”による交換労働と割り切っている人もいたが、多くは24時間拘束され、趣味やゆとりの時間などの自己実現の機会もなく、“犠牲感”がみられた。しかし、親（義親）の介護に関しては自分が最も精通しているという“介護者としての自負心”もみられた。男性の場合は、介護者であること自体に対する“役割への抵抗感”がみられた。介護役割に対する評価では、世間の期待に応えて“孝行な子どもや嫁”であると評価されることでの満足がある反面、“低い評価”しかされず絶対的存在である神に救いを求めている様子もみられた。

愛子さんは「自分たちの世代は、親をみるのはあたりまえとってきたから」と言う。

嫁が介護者の場合、身の回りの世話は嫁の役割と考えきちんと行っているが、老親と嫁との会話は少ない。「姑が『使用人のように呼ぶ』と秀子さんは話している。

孝子さんは、寝たきりで鼻腔栄養をしている姑のキヨさんの介護をしている。L家ではキヨさんの遺族年金から毎月の生活費を補助されており、孝子さんは、「仕事に出る代りに介護をしていると考えている」と話している。そして介護の技術を習得し、キヨさんに適した方法で介護をしており、「私が介護の方法を一番知っている」と話している。

秀子さんと常子さんは10年近く介護のための毎日を送っており、同世代の人達と比べて「私の人生は何だろうか」と言う。

政治さんは痴呆のため順子さんに卑猥なことを話す等の行動がみられ

表3 介護に伴う役割関係

		世 話 係
背景	家庭内の地位	<ul style="list-style-type: none"> ・親から家計費に経済的な援助を受けているので、家で看るのは仕方がない ・長男の嫁だから、親の面倒をみなくてはいけない ・外で仕事をしてなくて、家にいるのは自分しかないから（家事専念）
	社会規範	<ul style="list-style-type: none"> ・親の面倒をみると近所の人がなんというか（世間体） ・親の面倒をみるのは子どもとしてはあたりまえのこと ・介護は女の仕事 ・介護は家族内の問題（家族の閉鎖性）
関連事項		<ul style="list-style-type: none"> ・介護をしていない人はどんなに大変なことなのかをわかってくれない ・夫が協力してくれるからやってくれる。または、もう少し手伝ってくれたら気持ちの上で楽なのに
介護行為		<ul style="list-style-type: none"> ・最低必要な世話だけは行うが、できるだけ老親に近づかない ・過剰な責任意識で、完璧な介護を目指す ・事故防止のため、痴呆のある老親に行動制限をする ・異性を介護する場合は、身体接触を避ける
介護の意味づけ		<ul style="list-style-type: none"> ・家庭内の労働契約として介護を行っている ・「私の人生は何」、時間的拘束による犠牲感 ・孝行な子ども・嫁として世間からの評価を受けている ・他からは介護の大変さをわかってもらえず低い労働評価しかされない ・外で働けばお金になるが介護は無償労働 ・老親のことは自分が一番よく分かっているという介護者としての自負 ・男性は介護役割への心理的抵抗がある

たことがあり、順子さんには嫌悪感とともに性的抑制が欠如した行動への戸惑いがみられた。さらに入浴介助することに抵抗感があり、順子さんの夫が入浴介助をしている。また、息子が介護する場合には母親側に羞恥心があり、排泄介助はできるだけ同性にしてもらおうとする様子がみられる。

(2) 世話係と情緒関係の関連 (図2)

介護者の「世話係」としての認識度と親との情緒的关系を続柄別に検討した。I群は「愛情」の要素が強く「世話係」としての認識が高く、娘に多く認められた。II群は「世話係」としての認識は高いが、情緒関係では「愛情」と「葛藤」が同程度に認められ、続柄としての偏りはなかった。III群は「世話係」として認識しているが、「愛情」よりも「葛藤」が多く表現された群で、嫁にみられた。IV群は「世話係」としての認識は低く、「愛情」と「葛藤」は同程度にみられた群で、介護者の続柄は息子であった。

3) 勢力関係 (表4)

介護は長年の同居の後にもたらされたものであり、親子または嫁姑(舅)の関係においてはそれぞれの家族は歴史を持っている。今回のほとんどの家族は、男尊女卑、家長尊重の規範に生きてきた人たちである。

(1) 恭順

親孝行の社会規範のもとでは、子どもは“親に従う”ことが当然であり、親は尊敬すべき対象であった。しかし半身麻痺や老衰や痴呆により親の言動は、保護すべき対象となっている。にもかかわらず子どもは親に従ってほしいと思うが、親の言動は子どもをいらつかせることが多い。介護は“我慢”や“忍耐”であると思っても、親に腹を立てることがあり、親孝行な行為として介護をしているはずなのに、そのような自分を“親不孝者”と感じ自分を責めていた。親のことを考えて行動しているのに、“介護者の意にそわない老親の態度”に腹を立てながらも、介護を継続していくしかない状況におかれていることがうかがえる。介護がいつまで続くのか、見直し

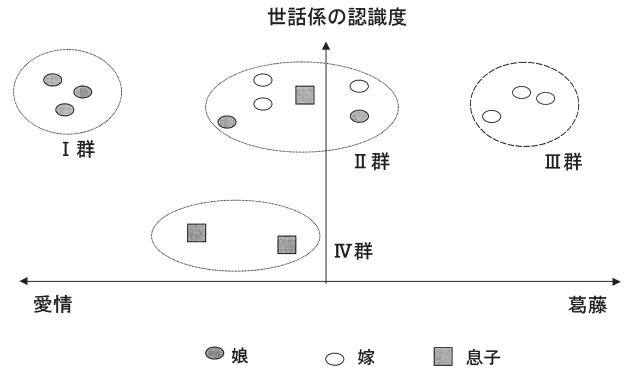


図2 続柄別にみた情緒関係と世話係の認識

の立たないことは、我慢だと思っている介護を、より苦しいものにしてしまうと考えられる。それらの出来事は日常の介護の中で繰り返し起きていることである。親に「恭順」でありたいと思うことで、介護者には心理的葛藤がみられる。

義男さんは母親の食事介助のある場面のことを、「口を開けようとしないので、腹を立てたことがある。母親に腹を立てるのは親不幸な息子ではないかと思った」と話している。

京子さん「親に逆らえないので、自分を抑えた」と言い、孝子さんは「人生は我慢だ」と言い、「義親の介護ができるのは、若い頃から苦勞してきたから」で、介護は苦勞の続きであり我慢ができるから介護ができると言う。

(2) 保護

障害を持った老親は、身体的にも心理的にも介護者に依存しており、介護者は老親を「保護」している。それは行動を制限して見守る姿勢に現れている。親の日常生活だけでなく、対外的な好奇の目や詮索からも“親の尊厳を擁護”しているのである。老いてゆく親の現実に直面しながらも、親の状態をできるだけ高く評価し、他人との間では“できなくなった親”のことを話題にしたい様子が見られた。

マツさんは脳卒中後遺症による麻痺と知的な判断力の低下や痴呆があ

表4 介護に伴う勢力関係

		恭 順	保 護	支 配
背景	人間関係		・親への愛着 ・親はいつまでたっても親	・親との葛藤 ・息子としての母親への権威 ・嫁舅姑間の勢力関係の逆転
	社会規範	・親には孝行し、従うべき		
介護行為		・我慢を自分に言い聞かせ、親との葛藤を回避する ・障害を持つ親のペースに従う	・親の尊厳を擁護するため痴呆の否認 ・危険防止のため老親の行動を制限する	・老親の行動や医療をはじめ生活全般を管理する ・老親の行動に対し一つ一つ指示する ・老親の行動に待ちきれないときには言語や身体的暴力
介護の意味づけ		・親孝行しているのに、親不孝を働く自分と思ってしまう ・介護は我慢と忍耐である	・老いゆく親と直面しなければならないが、一方ではその回避 ・社会の好奇の目から親を護る	・介護者としての役割肯定 ・介護者のペースに移行し心理的安定とゆとり

り、一つ一つの生活行動が緩慢で時間を要する。その間、介護者はつきつきりで介助しているか、近くで見守っている。介護者が実施すれば短時間で済むことを老人のペースに合わせて、待ちながら行動している。

また物忘れや夜間せん妄があっても、「うちのおばあちゃんは呆けていない」と常子さんや博信さんは言う。

(3) 支配

息子と母親の関係は、性および世代の違いがあり、C家では「息子の言うことは絶対的だから」と、常子さんは母親と息子の関係を話している。これは息子母親間の勢力関係において“息子の権威”が認められる。また嫁姑の関係では勢力関係の逆転現象が生じ、“逆転によるゆとり”が起り、その結果介護者である嫁に心理的余裕がうかがえる。

また老親の機能の低下と共に、「叱られても介護はやりやすくなった」と話しており、老親の心理的・身体的依存は増してくるが、介護者にとってはコントロールが容易になり、自身の心理的ストレスは減っている。

母親と娘間では、人間関係の葛藤が殆ど話題になることはなく、勢力争いがなかったことがうかがえた。しかし、介護者の立場から、機能の低下した“老親へ行動指示”をしている様子が見られた。介護における親子間の勢力関係は、介護者の立場の優位性が見られた。

「昔の大変さに比べると、今はたとえきついことを言われても聞けると愛子さんは言う。

考 察

介護関係についてEustisら¹⁴⁾は関係の象徴的性質として親密か契約かを基準に分析しているが、本研究では勢力関係も重要な側面であることが明らかになった。また介護者と要介護者の二者関係は家族内の地位や社会規範の影響を大きく受けており、日本の文化においては麻原ら¹⁵⁾の研究に示されるように世間体を考慮する必要があることが明らかになった。

1. 介護関係についての意識と介護行為

介護者の愛情は、きめ細やかな介護を可能にし、情緒的交流を大切にしたものであった。Bowers¹²⁾が世代間介護で、子どもが最も重要と考えるのは保護的な介護業務で、それは親の自尊心を護ることに由来すると述べているのと同様の結果であった。老親は病院から在宅に戻ると健康を回復しており、家族の愛情は在宅介護の基盤になるものであると考えられる。この愛情は長年の同居や養育の中で形成されたものであり、相互の愛着であり心理的依存でもあるといえる。その結果、相互依存が大きくなりすぎた場合には介護者は感情的に巻き込まれ、老人虐待が起こっており、これは重大な問題である。

世話係の側面が強く意識された場合、介護の仕方は最低必要な世話に留まっており、「儀礼的」になりやすく¹⁶⁾、老親と介護者の間では感情交流の極小化がおきていると

考えられる。このような状況は嫁に多く認められ、介護の犠牲感とも関連していることから、双方にとって苦痛となっているといえる。

世間体との関連で検討すべき点は、介護者の過剰な責任意識がもたらす介護への影響である。特に嫁の場合は、介護場面において実際の責任は負っているが、最終的な責任を他の家族員から委譲されていないために、より事故の責任を意識していると考えられる。事故防止優先の介護は老親の行動を制限し、家族によって寝たきりを助長する可能性があることを示している。

異性を介護することに対する困惑は、老人の性に対する偏見や嫌悪感が影響していると考えられ、個人の家という私的な閉鎖された空間で、全くの他人でない人間関係における対処の難しさを示している。これに対しては、プライバシーを護りながら対応する必要がある。アメリカでは子どもは同性の親にケアを提供する傾向があるという報告があり¹⁷⁾、家族内での介護担当にあたっては、双方の性も考慮される必要がある。

2. 介護関係における介護の意味

介護者は要介護者との関係において、愛情を感じている場合には介護を生きがいととらえ、老親にも介護者自身にも在宅でいることに意味を見出していた。

また、社会規範との関連では、愛情の変形としての親への恩返しは、介護者の世代が受けた教育である忠孝思想が強く影響していると考えられる。沖縄では長男が家屋とトートメー（位牌）を継承し老親を扶養するという規範¹⁸⁾があり、世間からは孝行な子ども（嫁）であると評価を受けているが、介護を担当することでの犠牲感は介護者の自己矛盾を増大させていると考えられる。

老親を介護することは子どもである介護者にとって、愛情の表現の場として肯定的意味づけができた。しかし、介護がシャドウワーク¹⁹⁾として無償の労働とされてきた経過があるため、介護者が自己の行為を価値あるものとして意味づけすることを困難にしていると考えられる。

3. 老親介護における家族の展望

介護行為は本来、メイヤロフが述べているように「ケアをとおしての自己実現」の機会であり²⁰⁾、老いと向き合っていかなければならない自己の成長過程となり得るようにするために、介護者が自分の体験を意味あるものと認識できるようなサポートが求められている。つまり介護者にとっての介護の意味は、親の幸せを願う介護者の内的欲求が満たされ、介護に対する高い対外評価が得られることであり、さらに介護以外の自己が実現できる時間と空間が保証されることである。また、老親にとっては在宅での生活の質が確保されるような介護が提供されることである。

在宅での老親介護は社会から隔離された閉鎖的空間

で、情緒的にも近い関係にある家族間での身体的・行動的・社会的な扶養であるため、家族の閉鎖性が助長されやすい。家族の閉鎖性は、野々山²¹⁾が指摘するように「家」意識や固定的性別役割の考え方の根強さによるものである。しかしながら介護保険制度の導入により、第三者が家族の中に介入することが多くなると予測される。介護における家族のケアと看護職や介護職による専門的なケアとの役割分担が明確になることが問われるであろう。研究結果から、在宅介護において家族の役割として最も期待されることは、労働力としての世話よりも情緒的交流であるといえる。社会資源の充実が図られてくるなかで、看護職や介護職は家族の代用ではなく、新たな地域ケア体制や家族支援体制を構築していく時期にきている。家族と専門家の役割分担を模索しながら、介護の社会化を進めていく必要がある。

また介護役割の取得には、Guberman²²⁾と同様に、親への愛や反施設感情が関与しており、在宅介護を支えるためには、施設看護の充実も合わせて検討されなければならないといえる。

最後に本研究の限界として、対象は沖縄の限定された地域であり、日本の社会一般的な老親介護の状況とは背景が異なる部分があり、老親介護の一般的な意識とするには、さらに多様な地域での検討が必要である。

謝 辞

本研究に御協力いただき、快く訪問を受け入れて下さいました地域の皆様、ならびに役場の保健婦の皆様から感謝致します。

本論文は平成4年度琉球大学大学院修士課程での研究データをもとに修士論文を書き改めたものである。

文 献

- 1) 前田大作, 冷水豊:障害老人を介護する家族の主観的困難の要因分析. 社会老年学 19: 3-37, 1984
- 2) 中谷陽明, 東條光雅:家族介護者の受ける負担. 社会老年学 29: 27-36, 1989
- 3) 藤田祥子, 黒田輝政:痴呆性老人在宅介護家庭の生活実態. 老年社会科学 9: 188-199, 1987
- 4) 高崎絹子, 佐々木明子, 谷口好美:老人虐待の概念化と在宅ケアの課題 日本の特徴と支援活動の方向. 保健婦雑誌 51: 524-532, 1995
- 5) 山本則子:痴呆老人の家族介護に関する研究－娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味－2. 価値と困難のパラドックス. 看護研究 28: 313-333, 1995
- 6) 井上郁:認知障害のある高齢者とその家族介護者の現状. 看護研究 29: 189-202, 1996
- 7) 佐伯和子, 深沢華子, 加藤欣子ほか:在宅介護者の介護動機の構造－続柄との関連に焦点をあてて－. 札幌医科大学保健医療学部紀要 1: 23-30, 1997
- 8) Dwyer JW, Seccombe K: Elder care as family labor: The influence of gender and family position, J Family Issues 12: 229-247, 1991
- 9) Blumer H: Symbolic interactionism Perspective and method. Englewood Cliffs, Prentice-Hall, 1969
(後藤将之訳:シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法. 東京,勁草書房, 1991)
- 10) 稲岡文昭, 樋口康子:看護研究におけるグラウンデッド・セオリー・アプローチ. 看護研究 20: 320-325, 1987
- 11) Glaser BG, Straus AL: Awareness of dying. New York, Aldine Publishing, 1965
(木下康仁訳:死の Awareness 理論と看護. 東京,医学書院, 1988)
- 12) Bowers BJ: Intergenerational caregiving: Adult caregivers and their aging parents. Advan Nurs Sci 9: 20-31, 1987
- 13) Chenitz WC, Swanson JM: From practice to grounded theory - Qualitative research in nursing -. Massachusetts, Addison-Wesley Publishing Company, 1986
(樋口康子, 稲岡文昭監訳:グラウンデッド・セオリー看護の質的研究のために. 東京, 医学書院, 1992)
- 14) Eustis NN, Fischer LR :Relationships between home care clients and their workers: Implications for quality of care. Gerontologist 31: 447-456, 1991
- 15) 麻原きよみ, 百瀬由美子:高齢者の世間体の意識構造と変化要因. 看護研究 28: 49-59, 1995
- 16) 木下康仁:老人ケアの社会学, 東京,医学書院, 1989, p134-140
- 17) Lee GR, Dwyer JW, Coward RT: Gender differences in parent care: Demographic factors and same-gender preferences. J Gerontol Soc Sci 48: s9-s16, 1993
- 18) 仲地智:沖縄の「家」と女性, 沖縄女性史研究 8: 41-47, 1992
- 19) Illich I: Gender. London, Marion Boyars Publishers, 1982
(玉野井芳郎訳:ジェンダー. 東京,岩波書店, 1984, p90-112)
- 20) Mayeroff M: On caring. New York, Harper&Row, 1971
(田村真他訳:ケアの本質. 東京,ゆみる出版,1987,p13)
- 21) 野々山久也編:家族福祉の視点. 京都,ミネルヴァ書房, 1992, p200-202
- 22) Guberman N, Maheu P, Maille C: Women as family caregivers: Why do they care ?. Gerontologist 32: 607-617, 1992

Caring Relationship between Frail Parents and Children as Caregiver in a Rural Okinawa

Kazuko SAEKI¹, Seizo SAKIHARA²

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University¹

School of Health Sciences, Faculty of Medicine, University of the Ryukyus²

Abstract

The aim of this study was to develop concepts of a caring relationship between dependent elderly parents and caregiver children. Fourteen caregivers who were caring for their parents over six months at home in a rural Okinawan community were evaluated. Data were collected by unstructured interviews with caregivers and by observation at their homes. Six categories of the caring relationship were identified. Three domains were described. The interviewees recognized "affection" and "conflict" in the emotional relationship; "charge of caring" in the role relationship; and "kyojun (allegiance)", "protection", and "rule" in the power relationship. A long-term care insurance system is scheduled to start in 2000 in Japan. There will be great emphasis on family members to provide emotional support to the dependent elderly parent. Professional care services will be expected to provide more technical assistance. Therefore, nurses need to understand the factors in the caring relationship between dependent elderly parents and caregiver children.

Key words : Parent care, Home care, Caring relationship, Family relationship.